



第2図 曇天域の南限としての天気界
密度/12km

気界としては、雨雪天域の南限としての天気界と曇天域の南限としての天気界を考えればよい。前者について上述の作業を施して得られたのが第1図であり、後者については第2図が得られた。これらの図は1月における3カ年間の資料を基にして得られた悪天気南限としての天気界密度分布図であって、これによって山陰側の冬の曇雪天がどこまで南下するかその大体の限界線の位置を知ることができる。

4. あとがき

以上は単なる分布図の作製であるが、天気界の最も現れやすいところは山脈の脊稜部よりもかなり山陽側にずれていることがわかる。とくに中部地区においてその偏位量大きい。ここは丁度中国山脈を断ち切る江の川の鞍部の風下に相当しており、鞍部を越えて山陰の悪天気が山陽側に押出していることが伺われる。多発帯が連続しないでいくつかに分かれているのは、その切れ目の辺で天気界の位置が場所的にばらつくためであろう。また雨雪天の場合よりも曇天域の南限天気界の方が複雑であるのも注目される。三次盆地を横切っていたり、岡山県の北部に東から西へ走る多発帯が津山盆地を囲うように

南へ走行を変えたりしている。後者は岡山・広島県の境よりやや東方に位置しており、帝釈高原の東縁に当る。三次盆地に侵入した曇天域の東限でないことは確かである。このときの曇天域は中国山脈から山地ずたいに帝釈高原上に拡がっており、いわば山地性曇天域の東限という意味を持つ。

もちろん、ここで求めた分布図は、異った部分相互間の同時性は裏付けられていない。だから個々の天気界が多発帯の主軸沿いに走りやすいということは全く意味しないし、それ故、分布形の全体を同時に説明できる一般論を試みることは意味がない。成目的に理解しようとする限り、部分毎に個別的に考察すべきであろう。

最後に、御指導を賜った福井英一郎教授並びに資料収集の際御便宜を賜った広島地方気象台はじめ中国地方の各気象台に深謝する。また滑川忠夫教授から貴重な御注意を戴いた。併せて感謝する次第である。

参考文献

- 1) 福井英一郎, 1938: 冬季における上越国境附近の天気界, 地理, **1**, 345—359.
- 2) 成功した例としては高橋百之, 1954: 冬季における北陸東海附近の天気界, 岐阜大学学芸学部研究報告, **2**, 1—5.
この結果は気象の事典(東京堂 1954) p. 384に示されている。
- 3) 高橋百之, 1954: 前掲
- 4) 鈴木秀夫, 1957: 日本中部の気候区界について 地学雑誌, **66**, 82—90.
- 5) 個々の天気界の発生位置と気流との関係は高橋氏によって追求されている。高橋百之, 1958: 天気境界と気流—中部地方を例として—, 地理, **3**, 441—451.

【新書紹介】

精密恒星及惑星早見

地人書館

380円

直径約40cmの円形星座図の上に、透明プラスチック板の回転板をつけるようにしたものである。星座図は白地に紺色で4等星までかかれ、星座には天文学会できめた星座名が入り、恒星にはギリシャ名が入っているので便利。有名な星の名前は、いくつかが別に印刷されているが星座図には記入されていない。星座図のまわりには月日が印刷されているので、プラスチック板をこれにあわせることによって、東京における1950年の全天の星座がえられ、プラスチック板上の赤線によって、星座図上の赤経、赤緯が高度、方位角に変えられる。気象観測では、オーロラや黄道光の観測などで、星に相対的な位置で書いた記録を整理するときがあれば便利だろう。中心軸にプラツキがあるから、あまり精密な換算はできないが、注意してやれば気象上の目的には十分役に立つと思われる。

なお、惑星位置の早見がのっていて、現在を中心として過去未来の惑星の位置を知ることができる。(有住直介)